

2018/2019 平成30年度



1979年に開校した葉山スクールは、40年間で400名を超える卒業生たちを送り出してきた。歴代すべての指導者を代表して、開校間もなくの頃から指導に当たってきた湯原コーチに感謝状を贈った

葉山の海で育んだ40年の歴史と絆。 働き盛りのOB・OGが旧交を温め、 ジュニア世代との親睦を深めた記念行事。

ヤマハ発動機(株)の海洋普及活動として1979年に開校したジュニアヨットスクール葉山が、この年40周年を迎えた。同スクールはその後、日本マリンスポーツ普及教育振興財団(JMPF)に引き継がれ、2007年からはJMPFを統合したヤマハ発動機スポーツ振興財団が運営を行っている。この間、たくさんの指導者や多方面の支援者、そして保護者の皆さんらに支えられながら、400名を超える卒業生たちを送り出してきた。

その記念イベントを6月と9月にスクールのホームマリーナである葉山マリーナで開き、合わせて160名以上のOB・OGや歴代の指導者、スタッフたちが参加した。当日は、スクールの支援者の一つである葉山マリーナヨットクラブの協力で相模湾でのクルージングやキス釣りをともに楽しむとともに、ジュニア世代の在校生と働き盛りの卒業生によるOP級対抗戦なども開かれ、長い歴史を刻んできた葉山の海をともに楽しんだ。

「小学校3年生から中学生までこの海に通い、大学生になってからはコーチとして後輩たちを指導した。あの頃は何かあるたびに腕立て伏せをした時代。その時に鍛えた身体のおかげで、いまま元気に過ごさせている」。笑顔で挨拶に立ったのは2期生の白澤陽太さん。「特に冬の海は辛いだろうが、みんな頑張れ。40周年おめでとう!」と在校生を励ました。

開校間もなくの頃から指導を行ってきた湯原浩一ヘッドコーチは、「つねに安全第一で運営してきた。その間、事故なく、子どもたちの成長を見守ることができたのが何よりの喜び。みんな立派に成長してそれぞれの世界で活躍しているが、この海で泣いたり笑ったりしながら仲間とともに過ごした経験がきっとどこかで役立つはず」と語り、歴代のすべての指導者を代表して箱守康之校長から感謝状を受け取った。

米朝首脳会談が初めて実現したこの年、平昌オリンピックで羽生結弦選手が2大会連続の金メダルを獲得した。また、テニス全米オープン決勝では、大坂なおみ選手がセリーナ・ウィリアムズ選手を破り、日本人選手として初めて四大大会を制覇した。こうした中、1978年開校のジュニアヨットスクール葉山が40周年を迎え、記念イベントを開いた。

スポーツチャレンジ助成事業

前年度に設定したジュニアの категорияには、中学生年代の2名を採択。2020東京世代のジュニア年代からの応募が多く、体験助成採択者の平均年齢は18.9歳となった。そのうちの一人、パラ卓球の友野有理選手は、自ら掲げた東京パラリンピック2020出場という目標を実現した。



■ 2018年度(第12期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	54件	11件	1,165万380円
研究助成	56件	14件	1,389万3,920円
計	110件	25件	2,554万4,300円

スポーツチャレンジ体験事業

■ ジュニアヨットスクール葉山

34名のスクール生で新学期をスタート。低学年のスクール生には海や自然を楽しむことを主眼に指導を行い、ジュニア・ユース世代は競う心と力を養うため、各種競技会に積極的に参加した。

■ セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

全国44クラブから164選手が参加。前年度同様、レーザー4.7級とレーザーラジアル級は世界選手権派遣の国内選考を兼ねて開催された。



■ スポーツ教材の提供

全国675校・団体から申請を受け、抽選会を経て120校・団体にスポーツ教材を提供した。また指導サポート付きスポーツ教材の提供[「はじめてのタグラグビー教室」を、ヤマハ発動機(株)の協力のもと5校で開催。2019年ラグビーワールドカップ日本大会までの5年間で、合わせて41校を巡回した。

■ 全国児童 水辺の風景画コンテスト

第30回の節目を迎え、662団体・9,928点の応募作品から入賞42作品と入選634作品を決定した。大臣賞受賞者は、在籍校等の協力を得て表彰式を開催し、入賞作品はジャパンインターナショナルポートショーの会場や、ヤマハ発動機コミュニケーションプラザにて展示した。



スポーツチャレンジ啓発事業

■ 第11回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞



[功労賞] 荒井 秀樹 氏
パラノルディックスキー、ゼロからの挑戦



[奨励賞] 日本スケート連盟スピードスケート科学サポートチーム
平昌オリンピックのスピードスケートマスタートおよびチームパシュート競技へ向けたレース分析サポート

■ 調査研究

障害者スポーツをテーマとした地域調査として、①前年の静岡県調査の報告と啓発活動および県民意識調査、②先進的な地域活動を展開する福岡県の調査と座談会を開催。また、横断的な社会環境調査として、①大学での先進事例、②パラリンピアンへの社会認知度、③競技団体に対する調査を行った。一方、トップスポーツの調査研究では、トップスポーツを活用した地域活性化をテーマに競技団体調査を実施した。